
ラブカクテルス その48

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その48

【Nコード】

N5861D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は磨いて大事に育てたカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は恋愛歌手でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は昔から歌を歌うのが好きだった。

よく母親と手を繋ぎ、歩く道筋には二人の歌う曲の音符達が、流れる五線譜の上で気持ちよさそうに泳いでいたことだろう。私は得意で、テレビから流れる気に入った曲を意味も知らないのに、自分が聞こえる通りに口に出して歌った。それが言葉でなくても構わなかった。だから英語でも、リズム音でも自分なりの解釈に任せてそれを歌っていた。

でもそんな私の歌を母は優しく頭を撫でて誉めてくれるのだった。私は照れながら笑い、そんな時から私の夢は、歌手になることになった。

そんな小さい子供の言う夢なんかその時だけの気まぐれ、はたまた大人を喜ばせたい一心の嘘。大概の親を含めた大人はそう受け取る

単純な一言。しかし、うちの父親はそうではなかったのだった。

私の父親は無類の音楽好き。

後で聞いた話では、若い頃はギターを弾きながら街頭で歌を歌い、そんな中で意気投合した仲間とバンドを組んで、レコードまで出したほどだったらしいが、仲間の内の恋愛のトラブルからそれはあつけなく崩れて、結局デビューすることもなくして父の音楽活動は終わったのだそうだ。

そんな経緯を考えると、普段から歌うのが好きな私を見て、何も期待しない方がおかしい話なのか、私には何とも言えないところだ。だが、サクラが満開になって、いよいよその花びらが哀愁を漂わせて散り始めた少し肌寒い夕暮れ時に、私は父親に連れられて音楽教室に行ったことを覚えている。

その時履いていたのはお気に入りの白い艶やかな靴で、でもサクラの花びらが沢山ついて、うっすらした桃色になっていたことを何だかはっきり記憶している。

父親はよろしくお願いしますと、当時五歳だった私の頭を手でグイッと下げさせた。その時にその私のお気に入りの靴が目についたのだった。

私は挨拶をしながらも、気はその靴に注がれていて、頭を上げた時にはここがどこで、これから何をするのかなんて考えすらなかった。ただ、目の前の靴につく、そのサクラの花びらを取った方がいいか、それともそのままの方がいいか、そんなことが頭の中を支配していた。しかしそんな頭をハッと、させたのはその音楽教室の先生の一言だった。

ねえ？あなたには好きなものをみんなここで捨てて、歌だけを歌うことが出来るかしら？

私はその質問に、靴の花びらの事を言われている気になって、やっぱりこの靴には艶やかな白が似合う。

花は散っているものより、咲いてるものが美しいと、はい。と返事

をした。

その人生の枝分かれの先に、散った花びらでなく、私に似合う新しく可憐に咲き乱れる花を咲かそうと、五歳の私はその時、何のためらいもなく、歌を取ったのだった。

しかしその道は厳しく、過酷だったが、それだけのレッスンを私に仕込む先生は初めて私が歌を聞かせたその日から、人を惹き付ける何かを私は持つていると感じ、そのせいで熱くなり、そして父以上に私に期待を持った。

私は初め、それがいやでいやでたまらなく、よく仮病を使って休みたがったが、連れていく母の、私の歌を聞きたいなーの一言にいつも負けて、しぶしぶ教室には通い、小学校に上がる頃には、自分が歌を歌うことに、だんだん何らかの変化がわかってきて、つまり上達していることに気づいて、それが楽しいと感じられるようになっていた。

いつも厳しく叱る先生も、褒めてくれることのほうが多くなり、私はそれに喜びさえ感じるようになっていたのだった。そして、その頃から父は、私を連れて色々なコンサートや、ライブに連れ出すようになり、私に刺激を与えて、どんな曲やアーティストが自分の目指すものか、もしくは色々感じた後に、その中にない何かを見出すか、そんなことを思い、ロック、ポップス、ジャズ、アイドル、オペラ、シャンソン、そして演歌。ひどい時には、寒い冬の夜を、路上で歌う若者達を見て回るなんていう、変わったこともよくある日常として行なったのだった。

しかし私はそれらを気がつくとも夢中になって欲して、自分の歌唱力と置き換えながら、入り込み、だんだん自分のものにしていくことを、自然にしまし癖がついた。

人を惹き付ける、その歌への追求。それは私の生活の全てとなり、やがて心はいつしか、あの大きな舞台のセンターに立ち、多くの人の歓声を浴びることに変わっていったのであった。しかし、そんな

私の想いはヨソに、私はなんと中学を卒業するまで、身内と先生の前以外で歌うことが許されずに、逆に、学校で行わる音楽の授業なんかでは、下手を装い歌うよう、父と先生に言い聞かされ、そんなことから各種のコンテストなんかにも私は出ることが叶わずに、自分の力を試す機会もなく、胸にモヤモヤを抱えて私の早春期は終わった。

しかし私の歌手としての幕開けは、唐突にやってきたのだった。

高校に入って、翌年を迎えて間もないある日、私はいつもと変わらず、他の子が部活や塾で自分探しをしている中で、もう、自分の家くらい親しみがある音楽教室に行くと、見慣れない男の人が教室に足を組んで、私をジロジロ見ながら座っていたのでタジロいだ。

私はその視線にかなりの抵抗を覚えて先生に説明を求める眼差しを向けて見ると、気にしないでいつも通りに授業をするように言ってきた。

私は理解できないその返事に不快感を持ったが、容赦なく始まったレッスンの従うしかなかった。

男は姿勢も、表情も変えずに、終始私を見つめて、授業が終わわり、私が教室を出ていっても、その姿を保って動かなかった男を、私は人形？とも思ったが、その後先生と何かを話す姿を見て、やはり人間だと確信したのだった。

それからしばらくして、その人形男は私の家に現れて、私を驚かせた。

私は人形男を怪しいと思ったが、実は父の知り合いらしく、そして母も知っている人みたいだったので、また驚いた。

そして実は驚くにはまだ早かったらしく、人形男は、なんと、某有名レコード会社のプロデューサーだと言ったのだった。

父は、人形男さんを昔のバンド仲間で、そして今も音楽の世界で活躍しているのだと言い、今回新人の売り出しを考えているところにバツタリ偶然二人が出会ったことで、前回のレッスンの出来事にな

ったのだと言った。そして、人形男さんは、もし私がオツケーなら、今すぐに私を歌手として成功させてあげるけどどうする？と聞いてきた。

私は父親の顔を見ると、父は笑みを浮かべて頷き、母は涙を抑えて私の頭を優しく撫でて抱きしめてくれた。

その瞬間、私はいよいよ歌うことができるのだと実感して母の背中に腕を回した後に、お願いしますと言ったのだった。

次の日、私と父は音楽教室に別れてを告げに足を運んだ。

先生は、私にいいよね。あなたなら大勢の人に愛される大物に必ずなれると、涙を浮かべて肩を強く握り、頑張ってねと言った。

私も今までの苦勞、いや楽しかった思い出が蘇るのを覚えて、幼い子供のように別れを惜しみ、泣いたのだった。

私達は、二人で写真に写り、少し照れる先生に、初めてサインと言うものをした。

でもそれは、ただの汚い字の、私の名前だった。

それで思いついた事が、芸名。それを先生につけてもらえるように、名付け親を頼むと、先生は、迷う事なく、サクラがいいと言った。

私はそれが瞬間的に気に入ったのだった。

私はそれから、コソコソと人形男さんとスタジオに入り、極秘のレコーディングを行なった。

それは、私の普通の生活と共に行われたため、なかなか早くは進まなかったが、焦る私を人形男さんはうまく転がして、そして遂にデビュー曲が仕上がった。

初めは有線と、ラジオを使って、私の曲は街に静かに流れ込み、自然と耳に入るように展開された。

まるで埋めただけの種に優しく水をやるような感じに。

それはだんだんと土に染みて、種まで届くのに大した時間を必要とせずに、話題になり、話題が話題をよぶ中、それでも地表に芽を出すのにジラしてジラして、時を待った。

そして、その年の春、私はとうとう芽を土から起き上がらせて、日の光の前に堂々と姿を表したのだった。

私の初の顔見せの場になったのは、某有名レコード会社の主催した三十周年を記念したイベントでだった。

私はそのレコード会社の期待の新星だと言われて、用意された舞台上で、初めてナマで人前に立って歌を歌った。

私の初のデビュー曲はソウルフルなバラードだった。

私は歳に似合わないであろう、切なく擦りきれそうでいて、甘い、凄みのある声を豊かに咲かせて、心地よい緊張感の中、その舞台を歌い上げたのだった。

歌い終わった後には、何の、音という音をゆるさないキーンとした空気に場内が支配され、少し時間が止まってしまったかのような空間に、ようやく拍手がしだすと、それはみるみる間にそこにいた全員の手を、止まっていた時間から引つ張りだすかのように後に続かせ、大きな割れんばかりの地響きとなって鳴り響いたのだった。

私は満面の笑みを浮かべて頭を下げると、その顔を上げた途端の光景が、真っ白に輝く光に覆われていて、それがカメラのフラッシュだと気がつく前に、目につく残像の数で何も見えなくなり、笑顔を早々に止めて、舞台を後にした。

そして翌日のスポーツ新聞の見出し一枚を、その笑顔で飾り、朝のニュースでも、芸能コーナーではなく、社会枠で取り上げられる、異例の項目で画面に映ったのだった。

それを見た私は、嬉しく、そして複雑な心境でそれを眺めていたが、もう後には戻れないことを実感する瞬間でもあり、弛んだ気持ちはまた、一気に緊張を取り戻した。

その日の学校は大変な騒ぎになるのが予想されていたので、私は特別に休校の許しを学校に得て、レコード会社の迎えの車で、一時都会の真ん中といったところに立っている、高層マンションの一室に逃げるように、隠れるようにして居座った。

そして、その高い高い部屋から下の街並を見渡すと、何だか自分が別の世界の住人になったようで、また複雑な気分になった。

そこに、人形男さんと、レコード会社の社長さんがわざわざ様子を見にきてくれ、私の気持ちの切り替えを心配してくれたが、本当の理由はこの先の学校生活の事で、日本在住の外国人のためのインターナショナルスクールへの転校と、今後の歌手としてのスケジュールを決めた話をいきなりだし、同意を求めるといいながも、断ることさえ出来ない空気で、難しそうな書類へのサインを書かされる自分に、戸惑いを感じた。

しかし、そんな私を人形男さんは厳しい目で見ると、もう、サクラは普通の人ではないんだよと、優しく冷静に言った。

私はサクラという言葉に、そう言えば、ここは高い場所なのに、桜がちつとも見えないことに気付き、ガツカリした。

二人はまた来るから、しばらくくつろぎなさいと、幾らかの札束をポンと机に置いていった。そして、どこかに行くときには表口にいるガードが守ってくれるからと、言い捨てたが、私はまるで捕虜、いや、逃げる事が出来ない鳥籠の鳥になった気分がした。

それから私には、ポップな曲と、ロックな曲がヒットを飛ばすのに丁度よく用意されていて、私はそれを最高の仕上がりになるように歌い上げた。

大概は一発OKで撮りは終わり、そして予想通り、いや、予想以上に私は一気に咲き乱れ、その年の新人賞、ベストアルバム賞、紅白、ミリオンセラーなど、全てにおいて最高の評価を貰うこととなった。

当然、お金もついてきたし、着る服なんかも、言われるがままにしている、面白いように流行を呼び、あれよあれよと、私は一年中咲き続けるサクラとなったのだった。

しかし、何かが足りなかった。

欲しいと思う全ての物を手に入れても、私の心はそう言って私をわがままにし、壊し始めていた。

だが、それがなんなのか、何が足りないのかは、どうあがいても誰も教えてはくれなかった。自分の心さえも。

私は歌うことが好きだ。だが、歌うことでたどり着くゴールがここなのか、私には確かめる術がなかった。

私はだんだんと生意気になって、関係者を困らせるのが日課になり、知らない内に、いい曲が廻って来なくなったせいで人気も下がり、世間でも飽きられるのと同時に、他の目新しいものへの関心から、相手にされなくなっていった。

それでも私はざまあないと、ヘソを曲げて、開き直るのだった。

そんなところに、人形男さんが私を訪ねてやってくると、ボイスレコーダーと、ギター、キーボードなどを差し出し、自分の世界に引き込まれるならそれでも構わないが、それを音や歌にしてみると出ていった。

私はそれを蹴り飛ばし、ベッドに潜り込んだ。

しかし暇という薬は私をなだめて、頭に不思議なメロディを浮かばせて、私はいつの間にかそれに没頭しだした。

意外だったのは、歌が好きなのは、楽器を持つと、水を得た魚状態で譜面の上を泳ぎ、浮き沈みのあるメリハリがすっかりした曲が出来上がり、鼻歌での歌のパートまでもが、はつきりとそれに乗って踊り出すのを感じた。

そしてそれらが生まれれば生まれる程、私の心は何かで満たされて潤った。乾いていた根っこに水が差してきたかのように。

私はウキウキしながら、その曲達に、いい歌詞を載せようと、ノートを開いた。そして始めは、カタカナで、思いついた意味がない言葉を並べて曲に合わせて、そこからこみあげる感情を探して言葉にしようとしたが、それが、なぜかできなかった。

私は作曲ができて、歌詞はできない。理由は簡単だった。歌う以外に何も知らないからだった。

しかし私はそれが何だと思った。そして哀愁漂う曲にはそれなりの単語と、サビにくる歌詞だけを強調するかのような文章らしいものを当てる、チグハグパズルのやり方で歌詞作りをし、とりあえず出来た曲を人形男さんに聞いてもらうことにした。

何度読み返しても、何を言いたいのかわからないその歌詞のついた曲に、私は内心ドキドキしたが、人形男さんはあっさり、いいなこれと、普段見せない笑顔を見せた。

私はその評価に満足したが、彼の笑顔のおかげで、素直に喜べずにひきつった

笑顔を作ってしまうのだった。

やがてそれらの曲は、私の休んでいた理由ということで、アルバムにし、作詞作曲が出来るシンガーソングライターを売りに持ち出し、再びのヒットを狙った。

そんな曲が当たる訳がなかったが、さすがはプロデューサーの目に敵っただけあって、予想通り？に大ブレイクになった。

私はたまげた。そしていい曲だという評論家や、リスナーの声に、何だ。なんでもいいのか。と解釈し、心底でガツカリしたのだった。しかしそんな想いとは裏腹に曲は売れ、幾つもの賞もとり、得意になった私は、売れるという結果が全てだと思いはじめた。

迷いがなくなった私は、ランキングのトップにいるのが当たり前の歌手として曲を調子よく作り続け、そしてそんな生活だけで、いつ

の間にか、それなりの歳になっていった。

風邪をひいた。

それだけは歌を始めた子供の頃から気をつけていたのに、その年の風邪の流行は、私のヒットを上回る勢いで広がり、私は無理をしないようにと、少し歌うことを休んだ。

それならと廻ってきた仕事はCMの撮影だった。私は乗る気ではなかったが、まあ、気分転換でもしろという人形男にそそのかされて、受けるハメになった。

慣れない場所に、慣れたスタッフ達。

全く違う世界に私は戸惑って、撮影はなかなかスムーズにいかなかった。

そこに、今回の撮影のもうひとりの目玉である、今一番注目を集める俳優さんが姿を見せて、私に近づくと、自分に嘘をついてごらんと囁いた。

私はいきなり話しかけてきたことに少しムツときたが、言われるがままやってみると、案外簡単に撮影は進み出して、自分の出番が要約終わって、ホツと腰を下ろすことができたのだった。その俳優は、爽やかな笑顔を浮かべて、私に再び寄ってくる、おみごと。いや、俺の指導のおかげかな？とおちゃらけてきた。

私は全国の女の人を魅了するだけはあると、その爽やかさに関心し、どうもありがとうと無愛想に言った。するとなんと、俳優さんは私に食事でもどう？と誘ってきたので、私は戸惑った。なにしろそんな事は今までにない事だったからだ。しかし俳優は手慣れていて、私の手を引くと、車に乗り込み、夜の街にくりだしたのだった。

私はまあいいかと、何も考えずにその時のいたずらに身を任せた。

俳優は演じるのが仕事。だから恋愛もゲームだ。歌手は恋愛の切なを歌う。だからいつでも本気だ。それが二人の違いだと勝手に思い

込んだ。

数々の聞いてきた歌達の、語りかける声に耳を澄ますと、そう聞こえる。

でも分かっているてもダメだった。やはり恋に効く薬はない、そうだ。今まで学校なんかで習ってもないのに、なぜ恋愛はできてしまうのだろうか。

私は主人公を頭で作って、歌詞を考えるが、片思いのものしか出てきやしない。

ダメだ。もう一度逢いたい。でもこつちから連絡するのはマズイ。心が痒い。搔きたくても触ることができない。どうにもできないはがゆさは、いつまで経ってもなくならなかった。

結局私は一晩中ベッドを転げ回るくらいしかできることがなかったのである。

人形男さんが、それから何日かしてマンションに顔出して、風邪の具合を見にきてくれた。

私の顔は最近の寝不足に加えて、不規則な生活のせいで、やつれ、目の下にはクマが張っていた。

そんな私を見て、お見舞いだと、玄関とリビングを仕切る廊下のドアを、人形男さんが開けたそこには、よっ！と、あの俳優がいた。私は焦りまくった。

なんてデリカシーがないんだ男ってやつは。化粧もしてない私は慌てて赤くなっているであろう顔を隠して、なんなんだお前達と、毒づき、なんとか照れを隠した。

また鈍感な二人は、部屋のあちこちを散策して私をからかい、何がお見舞いだと私は怒った。すると、人形男さんは、分かった邪魔しないから怒るなど出ていく始末で、結局部屋は、二人だけになった。私はどうしていいか分からずにベッドの上で黙って膝を抱えて座っている、俳優さんがその横に腰を下ろして、俺は俳優だから演じるのはうまいが、アドリブは苦手なんだと言って同じカッコをした。

私は真似するなと俳優さんをこずき、笑った。俳優さんも声殺して肩を小刻みに揺らして笑ったのだった。

それから間もなくしてサクラの新曲がリリースとなった。

曲名はアドリブという前向きな明るい恋愛物の歌だった。

その曲を聞きながら人形男さんは、なんだ。やっぱり恋してると、またいい曲書くなと呟き、

俺もこれくらいの曲を書けてたら、今頃お前の母さんとデキてたのかもな。と心の温かな部分にほんの少し触れてみるのだった。

そんな事に浸っているところに、ご機嫌なサクラが花吹雪のような笑顔で走り寄って来るのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5861d/>

ラブカクテルス その48

2011年1月27日12時42分発行